

森づくり構想シンポジウム結果報告（要約版）

- ・ 名 称 森づくり構想シンポジウム～全国・海外の動きと豊田市の森～
- ・ 日 時 平成 27 年 11 月 17 日（火）13 時～16 時 40 分
- ・ 会 場 豊田市能楽堂
- ・ 講演者 元林野庁長官 加藤 鐵夫氏
三菱 UFJ R&C 環境・エネルギー部 相川 高信氏
国立研究開発法人 森林総合研究所 石崎 涼子氏
- ・ パネルディスカッション
コーディネーター 相川 高信氏
パネリスト 加藤 鐵夫氏、石崎 涼子氏、原田 裕保氏（豊田市産業部長）

・ 内 容

【全体として】

- ・ 主催者予想を大幅に上回る 210 名の参加を得た。約半分は行政・森林組合などの関係者、残りが一般参加者。静岡県、岐阜県、石川県、京都府など県外からの参加者もあった。
- ・ 回収したアンケート結果によると、「豊田市の森づくりの内容を知る良い機会になった」「様々な立場からの意見が聞けて良かった」「会場の能楽堂が良かった」と好評価が多かった。一方で「もっと詳しく聞きたかった」「もっと市民に PR すべき」という意見も。

【加藤鐵夫「森林・林業の新たな動向と市町村の森林管理」】

- ・ 全国的な森林や森林政策の動向を紹介しながら、総括的に整理。
- ・ 日本の山の材積が増えて、いよいよ木材利用が動き出した。外材輸入が減る中で国産材利用が伸び始めた。合板、CLT、木質バイオマスエネルギー、木材輸出額の増加。
- ・ これからの社会のキーワード。①世界人口の増加と旺盛な消費、②日本の人口減少と都市への集中、③地球温暖化は 2050 年に +2℃ 予想。このような全体的な環境変化を政策立案担当者は頭に入れておく必要。
- ・ これからの森林のあり方は、森林の多面的機能が発揮される、自然災害に強い、省力的管理が可能などのポイントが大事。市町村の活動がこれまで以上に重要。
- ・ 壊れにくい路網と言うが、欧州と日本とで降水量が違う。そのまま当てはまらない。

【相川高信「豊田市の森林政策の到達点と今後の展望」】

- ・ 豊田市は、この 10 年、地域に根ざした政策設定を行うことができた（公益的機能を重視した森づくり、森づくり会議（地域との共働）、森づくり委員会の設置等）。
→ 市町村の実行力、コーディネート力と、共働の効果を証明した。
- ・ しかし課題もある（外部環境の変化、間伐面積の伸び悩み、特に環境林への転換）。
- ・ 「100 年の森づくり構想」。100 年先を見据えることの困難性。この 100 年のバイオマス利用の変化、気候変動の不確実性。管理上将来像の設定は必須であるが、しかし将来像を固

定することもできない。順応的管理、P D C Aサイクル（ダブル・ループ）が重要。

- ・人口の減少、「右肩上がりの時代の終わり」。少ない人数で、より広大な森林を管理する省力的管理の方向性。人手をかけずに自然の手を借りること。適切なゾーニング→自然のプロセスに委ねる場所。人工林の更新を天然更新で行う方向。
- ・都市間競争の時代、トヨタ自動車に選ばれる豊田市へ、森林の役割。50年後、100年後の豊田市民が何を望むか。

【石崎涼子「地域の森づくりと森林行政」】

- ・市町村の森林行政の担当職員数は1999年以降減少しているが、林業部門職員数の減少率は全体より高い。団体あたりの林業部門職員数（平均値）は1.8。この中で、豊田市の森林行政の体制は突出して充実している。
- ・森林・林業に関する専門教育を受けた経歴のある職員等がいる市町村は全体の10%。
- ・100年先を見通すことは難しいが、100年前に遡ることはできる。100年前は日露戦争、第1次大戦の頃、トヨタ自動車の創設、拡大造林、バブル、いろいろな変遷がある。
- ・スイスは補助金依存が強かったが、生物多様性保全や水資源の保全など優先項目を明確にして補助金改革に取り組んだ。
- ・連邦一州一市町村の3層構造のスイスの体制。市町村に森林官を配置、何十年も地域に密着体制。木材生産はしているが法律で「皆伐禁止」など保全の厳しいルール。
- ・しかし、豊田市でも人的資源や財源には限界がある、という事実の認識が重要。市町村森林行政として、何をどこまでやって、どこはやらないのか。市町村行政以外の主体とどのような関係を築いていくのか。

【パネルディスカッション】

- ・会場から回収した質問票に沿って、パネラーが順番に回答するという流れで進められた。
- ・市町村の役割強化と専門職の必要性。
- ・後継者のいない森林所有者が企業や行政に寄付する仕組み。ドイツでも特に若い世代は森に関心を持たないことが課題に。製材工場の運営は原木が集まるかどうかポイント。ヒノキ材を扱うことの難しさ。
- ・行政がやり過ぎると他団体が動かなくなる。適切な役割分担が必要。